

異学年合同による器械運動の学習可能性

— 子ども同士の直接幫助に着目して —

山本 瑠美
(釧路短期大学)

Exploring the Feasibility of Gymnastics Education through Cross-Grade Collaboration: — Emphasizing Peer-to-Peer Assistance —

Rumi YAMAMOTO

(Kushiro Junior College)

概要

本研究は、「極少数教授業・複式授業は、それ自体がもつ特殊性と課題を意識しながら、それをプラス面に転換していく必要がある」(玉井, 2012, p.15)という視点に立ち、へき地・小規模校の〈異学年合同〉における器械運動の学習指導の方法を模索するものである。その為にあらず、〈異学年合同〉の学習空間の特徴を示すために体操競技チームの学習空間について検討された。そこでは、器械運動の技は一人で実施されるが、その学習空間においては、他者の存在が与える影響も大きいことを示した。その上で、指導法の一つである器械運動である幫助活動(金子, 1974, p.256)と〈異学年合同〉での学習活動を想定し、その可能性を検討した。金子による幫助の記述を読み解くと「選手同士」での幫助が教育的効果をもたらす可能性を秘めた記述がみられた。これを踏まえ、異学年での器械運動の学習場面を想定し、学習内容を検討した。その結果、一つの同じ技の学習について幫助活動を用いることで、上級生と下級生に同じ内容で異なる学習内容を提供できることについて言及した。

1. 序

へき地・小規模校の体育では、人数が制約されることにより、通常学級で行われるようなスポーツを取り扱うことが困難な場合がある。こうしたネガティブな側面があるのは事実であるが、玉井(2012, p.15)は、「極少数教授業・複式授業は、それ自体がもつ特殊性と課題を意識しながら、それをプラス面に転換していく必要がある」ことを指摘している。

へき地・小規模校の学習形態には様々な形態があるが、体育では、「合同学習」(川前, 2022, p.33)が採用されることが多い。合同学習とは、「2学級以上の児童生徒が一緒に学習し、一定の人数の集団が必要な学習や、異年齢集団のよさを生かした学習を展開する教育方法」(川前ら, 2022, p. 33)である。体育で取り扱うスポーツ運動は、ゲームを成立させるために一定数の人数が必要なものが多いため、合同学習を採用することになることも多い。本稿では、器械運動における〈異年齢集団〉を考慮した上で、その学習可能性についてスポーツ運動学の観点から論じていきたい。そうすることによって、新たな学習方法を開発したり、これまでの実践に新たな意味づけをしたりすることが可能になると考える。

2. 体操競技の練習空間と異学年合同の接点

器械運動の学習は、運動財としての「技」を自分自身で〈できる〉ことが目指される。この〈できる〉は、「木の葉の隠し絵のなかにウサギを〈見つけた〉とか、動く感じを〈掴んだ〉とか言うときに、われわれが誰でも経験するように、一種の体得によってその対象ないし身振りの感覚状態が〈了解〉される」(メルロー=ポンティ, 1967, p.112)ような出来事であり、その技の〈コツを掴んだ〉という状態である。この〈コツ〉は、学習(練習)によって、発生し、習熟していく。つまり、〈できない〉状態から学習をして〈できる〉ようになり、できた技が習熟し、発展技へと変容していく。器械運動の技は、他のスポーツと異なり、一人で実施することから、他者と協力したプレーなどはないが、練習の中では、他者は重要な役割を果たしている。実践場面では、他者の動きを観察することで〈コツ〉が発生することは、よく知られていることである。

さて、体操競技チームやクラブのほとんどは、同じ体育館の中で、競技を始めて間もない育成段階の者と長い競技歴をもつ者で構成されている。すなわち、異学年・異能力の集団であると言える。こうした練習空間で、選手はそれぞれの課題を練習する。〈コツ〉を探し求める練習では、

すでにできている人の動きを注意深く観察することで、技の課題解決のヒントを得ようとすることはよくある。時には、できている人にアドバイスをもらったり、教えてもらったりすることは、自分自身でも体験してきたし、またそうした場面を過去に何度もみてきた。一方、教える側は、アドバイス等することで、その技の理解が深まったり、相手にどうすれば動感が伝わるのかを考えたりするようになる。こうしたことは、複式授業でみられるような、「分かった人がまだ分からない人に対しての教え合いを進めることにより、学習進度が早い子どもも学習内容をいっそう深めることができる」(玉井, 2019, p.82) という現象に類似している。

このように、技は、一人で実施するものではあるが、その学習空間では、他者の存在は大きく、同じ技を取り上げていても〈教えられる子ども〉と〈教える子ども〉の学習内容は大きく異なるのである。

3. 異学年を想定した幫助活動

器械運動の学習指導では、技の〈コツ〉を効果的に掴まされるために、様々な方法がとられるが、図1のように他者が運動遂行者に「幫助」をする場面がある。金子(1974, p.250)は、その著『体操競技のコーチング』において、「一般に、コーチまたは同僚が練習者の技さばきを直接に支えてやったり、抱きかかえてやったり、或いは安全のために着地位置に立ってやったりすることを『幫助する』という」と述べている。器械運動の技は、一人で実施するが、その習得過程では、他者による「幫助」を用いて実施要件を緩和させることでその〈コツ〉の発生を促すことはよく行われている。

幫助者は誰でもよいというわけではないことがすでに指摘されている(金子, 1974, pp.257-258)。また、幫助者は実施者よりも身体的に発達している方が都合がよい。例えば、1年生の子ども同士が幫助し合っても適切な幫助が行われることは考えにくいし、また1年生が6年生の幫助をするというのも現実的には考えにくい。そのため、一般的には、教師が行う方が〈コツ〉を発生させるという目的は達成しやすい。しかしながら、異学年合同であれば、上級生が下級生の幫助をするというのは、身体の発達差や技の習熟差もあることから、十分に想定でき、学習可能性を拡大する可能性を秘めていると考えられる。以下では、幫助について、文献を読み解きその異学年合同での意味を検討していきたい。

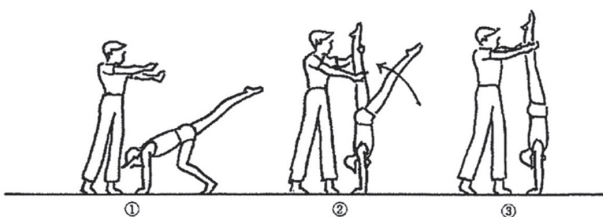


図1. 倒立における幫助の例(金子, 1982, p.261)

4. 幫助の文献分析

ここでは、先行研究における幫助概念の確認を行うとともに、幫助の教育的効果についての記述をみていきたい。

4.1. 幫助という語について

幫助に類似した語に“補助”がある。現場では“補助”が一般的にという語が使用されるが、金子は補助と幫助の違いについて、「補助は何らかの不足を補充して助ける意であり、補うことが活動の中心であり、その補充の結果、今までの不足が解消されて助かるという、極めて消極的の意味しかない。技を正しく成功させるために積極的に手助けをしていく行為を表わす必要がある。(中略)消極的な“補助”でなく、積極的活動として捉えられてはじめて、コーチング上に重要な位置を占め得る」(金子, 1974, p.250)ことを指摘している。本研究では、こうした金子の意味を踏まえ、補助ではなく幫助の語を使用する。

4.2. 幫助による教育的可能性

先述した通り、幫助者には、一定の幫助能力が求められることから、大人や教師が行うのが一般的であろう。しかしながら、金子(1974, p.256)は、「幫助することは単にコーチに限定しないで、できるだけ仲間と助け合って行わせることは、技の練習をプラスにするのみならず、多くの教育的効果を生むことができる」と述べた上で次のように指摘している。

「幫助者は幫助する技の運動構造を十分に理解し、その力動性までも共感できることが大切である。このことは、幫助者の客観観察の能力を高め、技のポイントを見抜く能力を促進する。幫助に積極的に参加することによってそれらを効果的に高めることができるので、少しでも正しい幫助を心掛けさせることは技の上達にも大きな意義をもつ。コーチは自ら幫助に立つよりも、できるだけ選手同士に幫助させるよう指導すべきであり、そのためには幫助の技術も正しく指導する必要がある」(金子, 1974, p.256)

このように金子は、コーチが幫助をするだけでなく、選手同士が幫助することで教育的効果を生むことを指摘している。これを、体育に引き寄せて考えれば、教師が幫助をするのではなく、子ども同士が幫助をし合うことで教育的効果を生むとも考えることができる。幫助者には、一定の幫助能力や身体的発達をしていた方が都合がよいことから、異学年合同であれば、上級生が下級生に幫助をするというのは、十分に想定できるし、また、教育的効果も期待できるのである。以下では、異学年合同での器械運動における幫助の可能性について述べていきたい。

5. 異学年合同での器械運動における直接幫助の可能性

ここでは、上述した幫助の教育的効果を踏まえた上で、その学習可能性について述べたい。

5.1. 上級生と下級生の関係

幫助者について金子（1974, p.257）は「幫助の技術を十分に理解し、またあらゆる技の運動構造によく通じていなければならない」と述べているように、一定の幫助の技能や運動についての理解が必要である。また、幫助者は、運動遂行者よりも、ある程度身体が発達している方が都合がよい。例えば、倒立の幫助において、小学1年生が6年生の幫助ができるとは一般的に考えにくい。それは、1年生の段階では、幫助の技術を習得することも難しく、他者の動きを理解することも難しいであろう。そして、自分よりも明らかに体格が大きい者を幫助することは不可能ではないにしろ現実的ではないと考えられる。

こうした事情を考慮すると、現実的には上級生が下級生の幫助者になることが望ましいだろう。すなわち、上級生が下級生の幫助をして手助けをしながら、下級生は、目標としている技を〈できる〉ようにすることである。こうした学習は、単式クラスでもできる学習の仕方であるが、異学年合同で行うからこそ主題化しやすい学習であり、へき地・小規模校の「それ自体がもつ特殊性と課題を意識しながら、それをプラス面に転換していく」（玉井, 2012, p.15）ことにつながる学習の仕方であると考えられる。

5.2. 上級生と教師の関係

小学校段階において、上級生が下級生の幫助をするというのは、決して簡単なことではない。それは、幫助者には、幫助の技術を習得することや、その技の理解も求められるからである。したがって、教師は上級生が〈幫助ができるようになる〉ための指導が必要になってくる。教師は、下級生の動き、そして上級生の幫助している様子を動感観察しながら、下級生の動きが改善されるように、学習活動を考案しつつ、上級生にも適切な指導をすることが求められるのである。教師は、上級生には幫助の指導を、そして下級生には、技の学習指導をしながら、両者を観察して適切な指導をすることが求められよう（図2）。

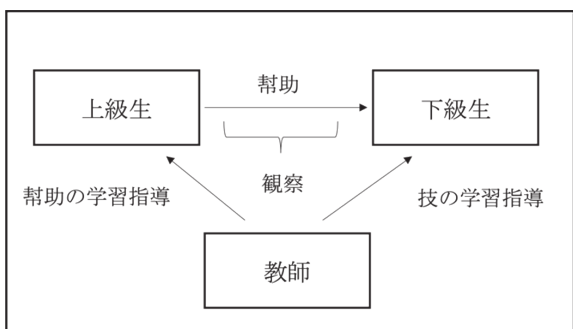


図2. 幫助の学習における上級生と下級生そして教師の関係

5.3. 幫助のの活用法と上級生への期待

授業においては、上級生も〈できないことをできるように〉し〈できることをより習熟〉させる学習者の一人である。したがって、単に上級生が下級生の幫助をするということが活動の目的ではなく、下級生に幫助が必要になった際に、その手助けをする、という一つの学習指導の方法であり、これにより上級生と下級生の学習可能性を拡大しようとするものである（図3）。

金子が、「幫助者の客観観察の能力を高め、技のポイントを見抜く能力を促進する。幫助に積極的に参加することによってそれらを効果的に高めることができるので、少しでも正しい幫助を心掛けさせることは技の上達にも大きな意義をもつ」と述べているように、幫助を学ぶことで、運動観察能力を高めることが期待できるのである。運動観察能力の向上は、技の習熟や、新たな技を自ら覚える際に活用される能力である。つまり、上級生による幫助は技の実施要件を緩和し下級生を〈できるようにさせる〉ことにもつながるし、一方で上級生自身の技の習得や習熟にも影響を与えるものと考えられるのである（図3）。異学年合同での器械運動は、こうした可能性を秘めており、へき地・小規模校だからこそ積極的にできる内容であると考えられる。

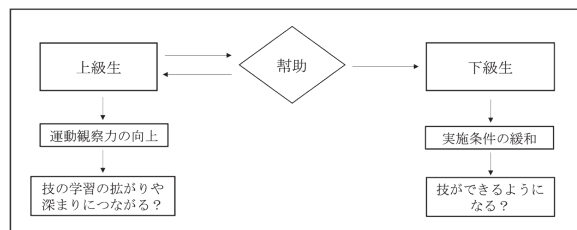


図3. 幫助の学習による上級生への期待

6. まとめ

本研究では、へき地・小規模校の器械運動の学習を充実させることを意図し、異学年合同を採用する意味を提示し、金子による幫助の教育的効果を手がかりとして、その学習可能性を提示した。そこでは、異学年合同による器械運動の学習の一つとして、上級生が下級生の学習を手助けするという意味で、幫助を用いる学習の意味を検討した。上級生の方が下級生よりも運動経験が豊富で、身体的にも発達していることから、こうした学習活動を授業の中に仕組むことができるのではないかと考えたのである。上級生が下級生の幫助をするということは、単に下級生を〈できる〉ように導く可能性があるだけでなく、上級生自身の運動観察能力を高め、それが上級生自身の学習にも役立てられる可能性があることを提示することができた。

今後は、実際の指導場面で、こうした構想がうまく機能するのか、またうまく機能させるには、どういった工夫が必要か、という検証の繰り返しが必要である。こうした実践とその分析については今後の課題としたい。

文 献

- Kawamae, Ayumi (2022) Practical Introduction to Multi-grade Teaching in Japan, Hokkaido University of Education Research Institute for Remote and Small School Education (HUE RISE).
- 金子明友 (1974) 体操競技のコーチング. 大修館書店.
- 金子明友 (1982) マット運動. 大修館書店.
- 金子明友 (2002) わざの伝承. 明和出版.
- 川前あゆみ監修 (2022) へき地・複式・小規模校教育の手引－学習指導の新たな展開－(改訂版) 北海道教育大学へき地・小規模校研究センター.
- 玉井康之 (2012) へき地小規模校における少人数・複式授業運営の基本的観点. へき地教育研究, 第67号. pp.15-20.
- メルロー＝ポンティ, M著/竹内芳郎・小木貞孝訳 (1967) 知覚の現象学1. みすず書房.